

エイブリズム論の展開とその理論的位置

—批判的エイブリズム研究を手がかりに—

○ 北星学園大学大学院 氏名 志田 圭将 (010186)

[キーワード] エイブリズム、障害者差別、能力主義

1. 研究目的

本研究の目的は、エイブリズム (ableism) 論の展開の内実、およびその理論的位置 (独自性) を明らかにすることである。

エイブリズムとは、一般に、健常者を中心とする価値観およびそれに基づくさまざまな枠組み (健常者中心主義) を指し、その結果として障害者差別をもたらすものとされる。このようなものとしては、エイブリズム論は障害者に対する健常者の「マジョリティ特権」を問題化する議論と位置づけられる。また、エイブリズムをより拡張的に定義する批判的エイブリズム研究は、上記の健常者中心主義を正当化する「特定の『能力』の選好」という要素に着目し、特定の「能力」の選好とそれに伴う社会的帰結を捉えようとする。この拡張的視点からは、エイブリズムは障害者差別のみならず、レイシズムやセクシズムなどのさまざまな差別としての「〇〇イズム」の正当化に関わるものと位置づけられる。

日本の議論では、エイブリズムという用語への言及は散見され、そこでは健常者中心主義 (ひいては障害者差別)、「できる」ことの価値化という要素への認識は共有されているものの、当該の議論の具体的内容に関する共通認識は得られておらず、その理論的な位置づけは曖昧な状態にある。とくに障害学の領域では、障害を障害者に固有の経験・問題として捉える見方 (障害者差別論) と、障害の経験・問題を能力 (できる・できない) の観点からグラデーションのなかで一般的に捉える見方 (能力主義論) との対照という議論の文脈で、エイブリズム論は、その「能力 (Ability)」に関わる論点が注目されることで、後者の能力主義論と実質的に重なるものとして理解される傾向がある (石島 2015)。

しかし、エイブリズム論は、近年の展開において、上記の能力主義論のそれとは異なる視角を提示しているように思われる。そこで本研究では、とくにエイブリズム論の現代的展開を担う批判的エイブリズム研究に着目し、それを日本における既存の議論との関係から整理することで、その理論的位置を明確化することを試みる。

2. 研究の視点および方法

批判的エイブリズム研究、とくにその展開を牽引する論者である Dan Goodley の研究 (Goodley 2014) を中心に、一連の議論を整理することで、エイブリズム論の展開の内実を示す。そして、日本での議論において対照的なものと捉えられてきた障害者差別論と能力主義論との関係からエイブリズム論の理論的位置を整理し、その独自性を明らかにする。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究であり、人や生物等を対象とした際の倫理的配慮に該当する事項はない。研究遂行に際しては、日本社会福祉学会研究倫理規定および研究倫理規定にもとづく研究ガイドラインを遵守している。また、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 研究結果

批判的エイブリズム研究では、エイブリズムは、特定のタイプの人間に特権を付与すること、その正当化の論理として「能力」を引き合いに出すこと、その「能力」とは必ずしも何らかの力量の量的な多寡に関わるものにとどまらず質的な差異をも実質的に含むものでありうること、として把握される。こうしたエイブリズムの働きを通じて特定の「能力」の理想化が生じ、さらにさまざまな局面で理想化された各要素がインターセクショナルに統合され、理想的な人間像を形作る「支配的な同一性」(Goodley 2014: 22)へと収斂することで、人間像をめぐる統合的な規範が生じるとともに、そこからの逸脱者として他者化された人々の排除・周縁化が生じるとされる。障害者差別(ディスエイブリズム)は、障害という局面でのこのようなエイブリズムによる排除・周縁化の一形態と位置づけられる。

5. 考察

エイブリズム論の視角は、構築(仮構)されたさまざまな「能力」の基準による正当化を受けながら人間像に関する特定のカテゴリーの規範化・他者化が生じるプロセスとメカニズムを分析する点を特長とする。障害問題に関しては、規範/逸脱としての健常/障害というカテゴリーの産出、それらを区別する「スラッシュ(/)」の構築と正当化の様相こそが問題化される。それは、一元的な基準による能力の観点から相対的に「できない」ものとして障害の経験・問題を位置づける能力主義論とは異なる視角を提示するものである。

また、障害問題に関する能力主義論は、一元的な能力に焦点化することで、障害を「障害者の問題」ととどめることなく同様のニーズを有する人々との政治的連帯の可能性を拓きうる議論と論じられてきた。これに対し、エイブリズム論は、障害という固有の経験にも他の固有の経験にも同様に関わるエイブリズムを問題化する視角として、能力主義論とは異なる仕方で、インターセクショナルな連帯という課題に応えようとするものといえる。

【付記】

本研究は北海道社会福祉学会 2023 年度研究助成事業による研究成果の一部である。

【参考文献】

- Goodley, D. (2014) *Dis/ability studies: Theorising ableism and disablism*, Routledge.
- 石島健太郎 (2015) 「障害学の存立基盤—反優生思想と健常主義批判の比較から」『現代社会学理論研究』9, 41-53.